

氏名	小澤 昂平
学位の種類	博士(神学)
報告番号	甲第434号
学位授与年月日	2016年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日 文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	諸国民のエルサレム巡礼 — 積義に基づく思想史的研究
審査委員	(主査) 長谷川 修一 廣石 望 月本 昭男 (上智大学神学部神学科教授)

I 論文内容の要旨

(1) 論文の構成

1 章 序

- 1-1 研究史を踏まえた本論の目的
- 1-2 研究の方法

2 章 釈義、諸国民による奉獻

- 2-1 イザヤ書 60 章
- 2-2 イザヤ書 56 章 1-8 節
- 2-3 イザヤ書 66 章 18-21, 22-23 節
- 2-4 イザヤ書 18 章
- 2-5 ゼファニヤ書 3 章 9-10 節
- 2-6 ハガ 1 章 15 節 b-2 章 9 節
- 2-7 ゼカリヤ書 14 章 16-19, 20-21 節
- 2-8 詩編 68 編 20-36 節
- 2-9 詩編 76 編
- 2-10 詩編 96 編

3 章 釈義、諸国民の帰依

- 3-1 イザヤ書 2-5 節 (ミカ書 4 章 1-5 節)
- 3-2 エレミヤ書 3 章 14-18 節
- 3-3 エレミヤ書 16 章 19-21 節
- 3-4 ゼカリヤ書 8 章 20-22, 23 節
- 3-5 詩編 22 編 28-32 節
- 3-6 詩編 47 編
- 3-7 詩編 86 編
- 3-8 詩編 100 編
- 3-9 詩編 102 編
- 3-10 列王記上 8 章 41-43 節

4 章 思想史的考察

- 4-1 釈義に基づく思想史モデルの形成
 - 4-1-a 諸国民による奉獻の思想史モデルの構成
 - 4-1-b 諸国民の帰依の思想モデルの構成
 - 4-1-c 上記二区分の思想史モデルの要約及び複合モデルの形成
- 4-2 諸国民のエルサレム巡礼の思想の史的背景
 - 4-2-a 聖書内資料に見るペルシア時代の背景
 - 4-2-b 聖書外資料に見るペルシア時代の背景
- 4-3 諸国民のエルサレム巡礼の思想史的位置付け
 - 4-3-a 諸国民のエルサレム巡礼の思想と聖書の思想の関連
 - 4-3-b 聖書外資料との関連
- 4-4 諸国民のエルサレム巡礼の思想の担い手と聴衆

5 章 結

文献表

以上

(2) 論文の内容要旨

本論文の各章の概要は以下のとおりである。

1章 序

本章では、研究史を踏まえ、本研究の意義と目的を提示し、研究対象となる単元を抜粋した。諸国民のエルサレム巡礼の思想は旧約聖書中に点在しているため、同思想の背景を探るには該当単元を包括的に扱う必要があるが、そのような研究は乏しいことから、旧約聖書全巻より諸国民のエルサレム巡礼のモチーフを含む単元を語彙や表現を基準に抜粋し、この思想の思想史的位置付けを提示するという本研究の目的を提示した。

2章 積義、諸国民による奉献

該当する単元のうち、「諸国民による奉献」のモチーフを含む単元に対する積義を行った。積義の方法を用いることによって、各単元における他の思想との関連が明らかとなり、それを元に各単元の思想史的背景を論じた。

3章 積義、諸国民の帰依

諸国民による奉献のモチーフを含まない単元（諸国民の帰依）に対する積義を行った。第2章・3章での分析を通して、該当する単元が総じてペルシア時代の背景に位置付けられることを論証した。

4章 思想史的考察

これまでの積義の成果を踏まえ、以下の方法によって思想史的考察を加えた。(一) 積義によって導き出された各単元の特徴を元に、伝承史的な手法を用いて全単元の時系列的な関連性を論じた。(二) (一)を思想史的背景に位置づけるため、聖書内外の思想を元に、ペルシア時代のユダを取り巻く史的背景を明らかにした。(三) 上記二点の成果を踏まえ、諸国民のエルサレム巡礼の思想史的位置付けを提示した。(四) これにより、諸国民のエルサレム巡礼の思想の担い手や聴衆像を明らかにした。

5章 結

旧約聖書における諸国民のエルサレム巡礼の思想は、ペルシア時代にいたるまでの時代の中で展開した聖書の思想史的文脈や、同時代のエルサレムを中心としたヤハウェ宗教を取り巻く複雑な環境の中にあり、とりわけ旧約聖書の救済の思想史的文脈に位置づけられる。その担い手の多様性や詩編における祭儀的な要素からは、エズラ、ネヘミヤ記等に見られる民族主義的な主張にもかかわらず、この思想が同時代の救済を示すものとして多くの人々に受容された可能性が考えられる。また、諸国民のエルサレム巡礼を含む単元には対外的な要素を含むものも多いが、各単元の元来の意図としてはペルシア帝国に対し、自身の優位性を主張するものというよりは、ペルシア支配下におけるヤハウェ宗教の信仰者たちにヤハウェこそが真の支配者、真の神であることを主張するものであることを解明した。

II 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

ユダヤ教が「選民思想」をもつ宗教であることはよく知られ、普遍主義的思想をもつキリスト教としばしば対比されるが、こうした普遍主義が、実は母体となったユダヤ教に起源をもつことはあまり知られていない。本論文は、アケメネス朝時代に遡るユダヤ教の普遍主義に焦点を当て、旧約聖書内に点在する、諸国民が唯一神を崇拝する平和な世界を謳う膨大な量のテキストを、伝統的手法によって精査し、それを同時代の思想と比較することによって、こうした思想が形成された歴史的背景を浮き彫りにすることに成功している。

本論文の1章では、「諸国民のエルサレム巡礼」と総括されて呼ばれてきたこうした普遍主義的思想を示す旧約聖書内の文学单元について、その先行研究の問題点を指摘した後、研究対象を絞り、論文の目的を明らかにしている。

2章では、「諸国民のエルサレム巡礼」と一括されてきた文学单元をその特徴から「諸国民の奉献」と「諸国民の帰依」との二つに分け、前者の思想を提示する旧約聖書内の文学諸单元の積義を行う。その積義を踏まえ、それぞれの单元の思想史的背景を、旧約聖書内外の文献史料との比較を通して明らかにしている。

3章では、後者に分類される文学单元の積義を行い、2章と同様の分析を行っている。2～3章では、伝統的な積義という方法を用いつつ、従来一括して取り上げられてきた「諸国民のエルサレム巡礼」というテキストを二つに分類して分析する点が注目される。

4章は、本論文の真骨頂である。2～3章で行った膨大な量のテキストの精緻な分析結果と、同時代の碑文史料から抽出したアケメネス朝時代の思想的傾向とを比較し、これら普遍主義的思想が出現した時代を説得力ある仕方で特定している。さらに、長い時代にわたり複数の編纂過程を経て我々の手元に伝わる各文学单元について、語彙や表現等の緻密な比較を通して、それぞれが成立した複雑な歴史に迫ろうとする意欲的な試みが展開される。とりわけ、このような思想がアケメネス朝時代の平和な情勢下でのみ生まれえたことを様々な史料を示しつつ実証している。

(2) 論文の評価

本論文は、旧約聖書における諸国民のエルサレム巡礼の思想を旧約聖書の救済の思想史的文脈に位置づけ、それがアケメネス朝ペルシア帝国支配下におけるヤハウェ宗教の信仰者たちに、ヤハウェこそが真の神的支配者だと主張するものであることを解明しており、その点できわめて重要である。聖書外の同時代文献史料・図像史料にも細やかな目配りを見せ、広い視野に基づいた卓抜した思想史研究となっている。したがって本研究は、その分析視点の有効性と、分析手法に表れた広い視野、そして同時代の多種多様な史料への目配りにおいて、今後の旧約聖書思想史研究の一模範となるものである。

ユダヤ教思想史の新境地を拓く本論文は、旧約聖書に貫徹する救済史観研究への新たな見取り図を提示した意義においても、高く評価できるものである。